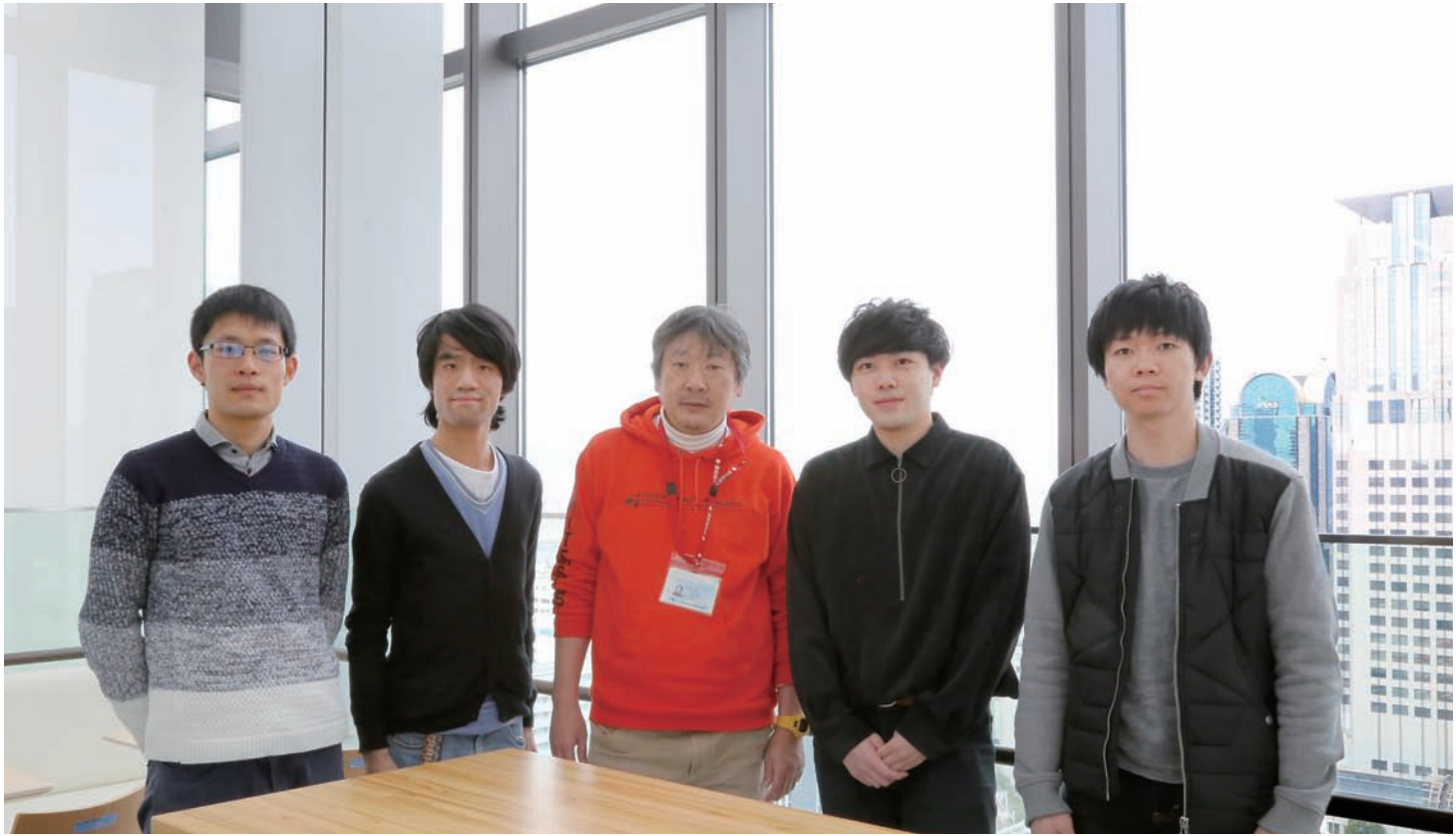

建築歴史文化研究室

Architectural History and Culture Lab.

妻木 宣嗣

TSUMAKI, Noritsugu / Associate Professor

ジャパンオリエンタリズムⅡ

Japan Orientalism Ⅱ

昨年度の卒業論文、小林史佳の論考を踏まえつつ、オリエンタリズムを超越するためのインターナショナリズムとナショナリズムについて考察を試みるものである。

幕末維新の外国人が残した記録は、それぞれによって、評価のされ方は異なっていたが、どれも同じ内容ばかりでパターン化できるほどであった。また例外もあるが、ほとんどの分野で維新前半は良い評価が多く、後半になると悪い評価が増える傾向があったという。これは一体何を表しているのか。もちろん維新後の日本は、脱亜欧入を目指したので、維新前の印象とは随分変わっていただろうが、あまりにも違いすぎる。

すると以下のような点に気づく。「彼らは日本に来る前から、ある程度の情報を持っていて、その情報で各自が日本に対するイメージを確認する作業を行ったと考えられる。これは、まさに日本版オリエンタリズムであると言ってよかろう（ジャパン・オリエンタリズム）。オリエンタリズムとはE.D.サイードの提唱した概念であり、人は情報が多ければ多いほど、他者と自己とを比較するとともに、実際の現場に行っても、情報を優位に置くことによって、結果的に現場を軽視する姿勢が表出する、というものである。今回の研究でも、同じような日本が描かれていることから、ジャパン・オリエンタリズムがそこにあったということがある」とする。

そしてその他者が作りあげた文化を自らの文化と考えるようになる。ところで、筆者らが思うに、さいわい、彼ら欧米人にとってジャパン・オリエンタリズムは、ほどほどに良いイメージを持っていたようである。

伝統は重要であり、京都はその「伝統」を上手く利用した事例である。京都は、時代と共に、つまりは近代国家化と歩を並べるように、「伝統の街京都」が創造されていった。太平洋戦争時、アメリカは日本の歴史的・文化的都市への爆撃を避けるべく、非爆撃マップまで作っていたという。「一度、「伝統の街京都」イメージが定着すると、それは極言すればガイドブック化し、観光客はこぞって、ガイドブックと同じアングルで写真を撮り、帰国した外国人は写真を片手に、ガイドブック通りの土産ばなしをする。この循環が確固たる「伝統の街京都」を作りあげていくのである」という。

世界で自国の文化・伝統を一番知らないのは、ここ日本である。自国の文化は、そうそう簡単に拭い去られるものではない。インターナショナリズムも結構だが、今一度、我々日本の文化を学ぶ時期にきているのではなかろうか。表層ではなく、国粋主義に加担しない、伝統などとは違う視点も含めた確固とした、そしてオリエンタリズムを超越した、ローカル・アイデンティティーの構築は急務である。深層レベルの日本文化を知っているのは、日本人以外なのかも知れない。日本人が気づかないところに日本文化がある、ともいえよう。

要は「日本人は海外によって日本文化の意味を見いだされる前に、自分で自らの文化を見いだし、発信するべき時代に来ている」。以上が本論考の大枠である。今こそ、先人からの英知を学びつつ、自国の文化に自信と誇りをもつべき時期にきているのではなかろうか。

青山 拓斗
AOYAMA, Hiroto

細川 帝王
HOSOKAWA, Ten

オタクは美少女の何に萌える

What Sexually Appeal to Otaku about Japanese Female Cute Anime Characters?

2017年の日本アニメ産業の市場規模は2兆円を超えた。去年の年末で行われた日本最大の同人誌即売会、コミックマーケット95では3日で57万人が訪れた。こういったアニメや漫画、ゲームなどのサブカルチャーの市場は段々と大きくなってきている。その世界で登場し、可憐な華を咲かせるのが美少女キャラクターである。可憐な彼女達にサブカルを好むオタクの多くが魅了された。もちろん私もだ。そんな私が、美少女の一体何に惹かれてメロメロなのかを主観的に述べていくのが本論考である。

大きく分類して、美少女は3つのモノで成り立っていると私は考えている。まず1つ目は外見だ。これが良くなければ美少女とは言い難い。「美」少女という程なので可憐、美しいのが当たり前であり、前提条件である。身体は人気が高い胸や尻はもちろん、脚、お腹、筋肉、骨といったフェティシズムの心をくすぐる箇所が存在している。上から下まで余分な部位などはない。そして当たり前ではあるが美少女は基本的には人間なので服を着て、美しく飾られている。そして普段服を着ているからこそパンチラが映え、更にその先にある裸が輝かしく見えるのだ。裸に興味がない者はいないが、見せればいいというモノではない。むしろ、見えてないからこそ服、そして下着という障壁に燃えるのだ。見れないのでどのような裸であるのかが認知できず、無限の可能性を持っているという意味ではこちらの方がセクシャリティであるとも言えよう。

次は中身、人間らしさである。美少女はお人形ではないので無感情ということは基本ない。現実の私達と同じく、嬉しい時には笑い、悲しい時には泣く。美少女が皆同じ行動をするとしても、感じることは異なり、それが表情や行動として現れ、一人一人に個性が出てくるのだ。そういったことを踏まえて彼女達の様子を見ると、中々に萌えるだろう。例えば大きな胸を持つ美少女が胸を強調するポーズで私達の前に立っているとする。その際、獲物を狙う獣のようにすごくノリノリで誘っている者と、顔を真っ赤にして恥ずかしがりながら誘っている者、貴方ならどちらを選ぶ？　同じポーズでも感じ方は全く違うだろう。ちなみに私ならシャイな後者の方が好みである。

最後に背景、シチュエーションや世界観である。美少女達が住む世界が私達の世界と同じとは限らない。フィクションであるので、美少女のレパートリーに富む。人間でなくとも、1000歳であろうと、小人であろうと、これは美少女という世界なのだ。そして、その世界で人生を歩んだ美少女は中身も世界観に合ったモノが出来上がる。そしてシチュエーション、場面が次々と発生する。これを活かさない手はない。夢のような世界で自分好みの夢のような美少女を描くことも容易い。

大きく3つに分けたこの要素が、美少女の元なのだ。全てが美少女を引き立たせるために存在するといっても過言ではない。物語のために人物や世界があるように、美少女のために物語や世界がある。そんな美少女に萌えて楽しむ1人が私である。どのように思い、感じ、興奮しているのかを書き記したのがこの論文であり、これを通じて少しでも美少女に萌えることを理解してもらえたら嬉しく思う。

坂本 康祐
SAKAMOTO, Kosuke

縁側 ――古代～中世絵巻からみた場として――

A Study of Behaviours of People in the Middle Age at “Engawa”

目的と背景

かつての日本の伝統的な民家（特に農家）には多く、「縁側」が設けられていた。縁は休憩場所、簡単な接客、収穫物の乾燥の場など、様々な用途をもっていた。また内外空間の中間にあることから、夕涼みや井戸端会議などの用途も担っていた。この縁側はもともと歴史的にどのような意味をもっていたのだろうか。本論考の目指すところは、ここにある。

古代、特に奈良時代までの建築には縁側はほとんどなかった。しかし平安時代になると、縁側が重要な役割を果たすようになる。このあたりを、絵巻物、図誌などから追いかけてみる。

まとめ

縁側の使われ方の傾向から身分問わず縁側は非常に多重化で重要な役割を持っていたが、身分によって縁の使われ方は変化した。しかし、縁側の板目の方向、板や竹など縁の材質によって縁の使われ方に変化はみられなかった。

貴族の場合、寝殿造において天皇は基本的に室内に描かれ、行事など特別な際に庇の間に描かれていることがある。濡れ縁に描かれているものは全くみられなかった。また、従者は多くは庭上、場合によれば濡れ縁に描かれ、庇の間や室内に描かれていることはなかった。つまり、人物は高位につれて室内、内部空間に描かれ、下位につれて庭上、外部空間に描かれている。室内、庇の間、濡れ縁、庭と壁がなくとも見えない壁にそれぞれ区切られていたのではないかと考えられる。

僧同士の場合、ある一人の僧は室内に描かれ、その弟子たちは室内の少し離れたところや、庇の間、濡れ縁に描かれている。従僧は濡れ縁、庭上に描かれている。

僧と天皇が描かれている場合、僧よりも天皇の方が高位のため天皇は室内、僧は庇の間もしくは濡れ縁に描かれていることが多い。

僧と庶民が描かれている場合、この多くは僧が説法をし庶民が聴聴する場面、僧が念仏を唱え庶民が集まる場面、僧に結縁のために庶民が集まる場面、僧の臨終の際に庶民が集まる場面である。これらの場面ではある一人の僧が室内の中心に描かれ、その弟子たちや従僧が傍に描かれている。その周りに庶民が描かれている。庶民は大勢の場合、室内、縁側、庭上といたるところに描かれている。しかし、少数の場合は室内の端や濡れ縁、庭に描かれている。

僧も貴族ほどではないが人物は高位につれて室内、内部空間に描かれ、下位につれて庭上、外部空間に描かれていることが多い。下臈はほとんどが庭上、一部濡れ縁に描かれている。その他の僧は身分問わずどの場所にも描かれている。

庶民同士は基本的に室内や縁側との境はなく、誰でもどこにでも描かれていることが多い。しかし、庶民の従者の中でも身分の低いものは庭上に描かれている。

今後の課題

この分析で古代～中世の絵巻物、絵図から当時、縁側が多種多様な使われ方をし、非常に重要なものであったと考えられる。今後は室町時代以降の絵巻物、絵図から縁側の使われ方、捉えられ方を分析し、現在まで時代とともにどのように縁は変化したのか研究する。

水口 拓馬
MIZUGUCHI, Takuma